心肺蘇生法に神様は必要か？

「『シンパイソセイ』？　なんですか、それ？」

　嫌な予感が胸を掠めつつも、聞いたことのない単語に妖精モドキが首を傾げる。そんな妖精モドキに、ゼウスはこれから何をするのか説明を始めた。

　それによると、どうやら心臓が止まった人間は、それを行うことによって先程の『自魂蘇生術』を使わずとも復活できるとのこと。具体的には『心臓マッサージ』を行えばいいと、ゼウスは言う。

「えっとね……『心臓マッサージ』っていうのはね、胸の真ん中辺りを強く押せばいいみたい」

　言い終わると、ゼウスは短く詠唱を始める。すると、瞬の胸の真ん中に、何やら円柱状の緑色のピストンが現れた。このピストンは『』と言って、ゼウスの神言の一つだ。ちゃんと実体を持っているかのように見えるが、実は風で出来ている。普通は攻撃に使う神言なのだが、今回は用途が違った。

　ゼウスが指を鳴らすと、ピストンが動いて瞬の胸を押し始める。しっかり瞬の胸が四センチ程押し込まれているのを確認したゼウスだが、不意に背中から呆れるような視線を感じ、振り返った。

「……どうしたの？」

　そこにいた妖精モドキに、冷や汗をかきながら首を傾げて尋ねるゼウス。

「あの……ふと思ったのですが、最初からそれをやれば良かったのでは？」

　最初から、と言うのは、つまりゼウスがこっちの世界に来た際に瞬を殺してしまった時の事だ。こんな方法を知っているのならば、何故『自魂蘇生術』など使ったのだろうかと、妖精モドキは不思議でならないのである。

「え……っとね、この『心肺蘇生』っていうのはね、死んでしまった人には効果が無いの。あくまでも『心臓が止まっている』人じゃないと……それにあの時は混乱していて、こんな方法があったなんて思いもしなくて……思い出したのは、ついさっきなんだよ？」

「……なるほど」

　どうやら納得したらしい妖精モドキに、ゼウスは心の中でホッと息を吐いた。

　この『心臓マッサージ』は少し時間がかかるので、一応他の説明もしようとゼウスは口を開く。

「今は私とこの子の生死がリンクしているせか、前みたいに混乱していないんだけどね。でも、お姉ちゃんの部屋にある、人間の『心肺蘇生法』が書かれている本を読んでおいて良かったよ」

　あれを読んでいなかったら、今はきっと混乱しているだけじゃ済まないだろう。そう思うと、ゼウスは長く息を吐いた。

　しかし、説明はまだ終わらない。

「でね……結構重要な事なんだけど、『心臓が止まっている』人でも、あんまり長い間心肺停止している人には、この方法を使っても蘇生出来ないみたい。心臓が止まってから五分程度経過するだけで、蘇生出来る確率が五割を下回っちゃうんだって」

「……ということは、ゼウス様は外に出ることが出来ても、あまり長時間は戦っていられない、という訳ですか。『心臓マッサージ』とやらをする時間を考えると、戦闘に費やせる時間は精々三分が限度、というところですかね……」

　そんな妖精モドキの呟きに、ピクリと眉を上げかけるゼウス。

「……ねえ、何を考えているの？」

　出てきた言葉には、押し殺されてはいるものの、それでも分かるくらいに怒気が込められていた。

「……いえ、何も」

　しかし、妖精モドキはそれを受けても、特に何も感じなかったかのように首を横に振る。訝しみながらも、ゼウスは今は追求しなかった。それよりも今は、もっとしなければならない事があるからだ。

　瞬の方に向き直り、おもむろに彼の唇を指でなぞるゼウス。『心肺蘇生』の話をした時からの嫌な予感が一層大きくなった妖精モドキは、恐る恐るゼウスに近づき、口を開いた。

「あの、ゼウス様？　どうなされたのですか？」

「ねえ」

「はい？」

　突然呼びかけられ、何故か素っ頓狂な声を上げてしまった事を心の中で叱りつけながらも、妖精モドキは不安を拭えない。

「この子に、私の事は秘密にしておいてくれる？」

「へ？　え……ええ、まぁ、構いませんよ？」

　頭の中で、取り敢えず後で説明するにしても、ゼウスの事をぼかすくらいなら問題は無いだろうと思う妖精モドキだが、それでもゼウスが何をしようとしているのか、何故そんな事を言うのか、どうしても気になった。いや、だからこそ聞きたくない気もしているのだが、それでもだ。

「……どうなされました？　というより、何故そのような事を？」

「……うん、そうだよね。いくら『気休め』程度にしかならないとは言っても、やらないよりマシだよね？　うん、きっとそうだよ。そう、そう。やらないよりはマシ……」

　意を決して尋ねたものの、返ってきた答えは、わけのわからない呟きだ。冷や汗を流す妖精モドキだが、次の瞬間、妖精モドキはアッと声をあげた。

　暗闇の中、若干ゼウスの頬が朱色になっているように見えたのは、恐らく妖精モドキの気のせいだろう。しかし、妖精モドキがそうは思えないのも無理は無い。妖精モドキの目に映る光景が、それを証明している。

　ゼウスは瞬と、唇を重ねていた。

「……ぅん……うん？」

　自分の頬に、何か小さいものがペチペチと当たっているのを感じた俺は、ボーッとする視界に黒い空を映す。

「……あ、目覚めましたかっ？」

　続いて聞こえてきたのは、聞いたことのある声だった。それが誰の声なのか、思い出すのに時間はかからない。そいつの名前を、俺は呟いた。

「妖精モドキか？」

「あ、はい」

　返事が聞こえると、ようやく視界がはっきりしてきたので、俺は上半身を起こす。キョロキョロと周りを見渡せば、そこはさっきまでいた公園だった。

「……あれ？」

　しかしそこにテュポーンはいない。まさか夢でも見ていたのかと一瞬思ったが、すぐに首を振る。あれが夢な訳が無い事は、この胸の痛みがはっきり教えてくれている。あの時しっかりと、俺はここに攻撃を受けたのだ。

「あの、どうしました？　仏頂面なんかして……もしかして、体に異常が？」

「いや……何か、自分の口の中に、自分じゃない人の味がしてな。ちょっと気味が悪い」

　妖精モドキの質問に、俺はそう答えた。口の中の唾液の量が多いのだ。おまけに何か甘い気がする。何故かは知らないが、背中が寒くなった。最悪の目覚めだ。

　だがそこで、俺はふと気が付いた。

「なあ……その顔、どうしたんだ？」

「いえ……別に何でもありません。気にしないで下さい」

　ニカッと笑う妖精モドキだが、その表情は、ちょっと酷いものだった。目は赤く、なんか擦られたような痕で顔も汚れている。もしこいつが女だったら、即行で顔を洗うべきだろう。

　分かってか分からずか、妖精モドキは空中に浮遊すると、俺に背中を向けた。

「……さて、帰りましょうか。お蕎麦も待っていることですし」

「……そうだな」

　取り敢えず聞きたい事は山ほどあったが、俺達は帰路についた。